

捜査は尽くされたのか

20年という歳月は人の記憶をどれだけ薄れさせるのだろうか。多くの記憶が失われる一方、はっきり刻まれている記憶もある。

2004年9月9日未明、愛知県豊明市の民家で加藤利代さん(当時38)と長男勇基さん(同15)、長女里奈さん(同13)、次男正悟さん(同9)が殺害され放火された事件(豊明事件)で、利代さんの実姉天海としさん(66)は、8日夜は「目が覚めたこと」を思い出す。

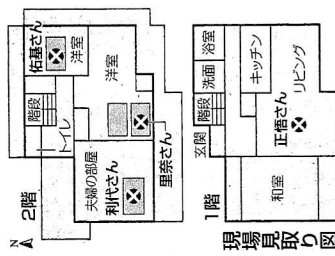
事件直前 鮮明な記憶

当時の気象を調べると、前日の7日夜は、全国で40人以上の死者を出した台風18号が東海地方に最接近し、愛知県内も激しい暴風雨に見舞われた。8日夜は台風明けの澄んだ夜空が広がっていた。目撃者たちを見ると、満月ではないが、天海さんの記憶にある月は「明るくうさぎが見えた。9日は正悟の誕生日。明日も晴れますように」。その晩、4人の命が奪われるとは思わなかった。

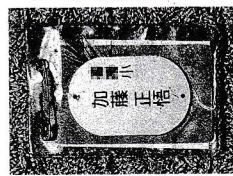
現場近くに住む60代女性は、7日の日中、子どもたちが台風の警戒で早く下校したのを記憶している。むかしした正悟さんが半ズボン姿を歩いてきて、信号で止まった。そこに里奈さんが自転車と友達を帰ってきて、女性の娘に笑顔で手を振った。それが生前の人を見た最後になった。

7日夜は多くの家が台風で雨戸を開けていた。だから入念

加藤 美喜 (編集委員)



遺品となった正悟さんの名札。事件当日が誕生日だったと愛知県内で



な計画を練っていたはずの犯人が下員に来ていたとしても、気配がなかったかもしれない。利代さん宅の北東角の壁には、事件の何方前からか、ピンクの塗料がかかっていたのを住民らが見ている。何らかの「目印」だったかもしれないと考える捜査員もいる。

ほかにも、何かを見たり聞いたりしながら、記憶のポケットに入ってきたまの人がいるかもしれない。それが何かの拍子で開くことを、天海さんたちは願っている。

果たして、豊明事件の捜査は「尽くされた」のか。

放火で証拠が失われた上、唯一生き残った夫は「別件逮捕」に抗議し警察に協力しなくなった。手掛かりが乏しい中、当時の捜査員は「やるだけのこと」は全くと主張する。

現場周辺の定時通行車両を何千台も当たった。歩いて逃げられる抜け道や、凶器や血痕、それらを洗った痕跡の有無、ルミノール反応なども徹底的に調べた。被害者によつてはなかったが、里奈さんの自転車のタイヤの空気が抜かれた出来事があったと知る。子どもたちの周辺も洗った。因果や恨みはどこにあるかわからない。錯誤もありえる。誰かと間違えられた可能性も含め、多角的に捜査したと強調する。

別の元捜査幹部は「殺しは動機、足、凶器、鑑(交差関係や土地勘など)の四つがないと『黒』にできない。金に困っているだけの人間ならいくらでもいる。真犯人ではない『類似品』に注意しないといけない」と話す。では「類似品」をつらす捜査、「白」にする捜査はどれだけやったのか。

「夫の当時の交際相手や、彼女が勤めていた店の関係者に十分、話が聴けていない」と言う元幹部もいる。夫が通った他の店の周囲や、外国人による犯罪などの可能性まで広げると「容疑な捜査ではない」とも聞く。夫の会社関係への聴取も、トランプの有無も含め徹底的にやっていたと言いが、すべて詰め切れなかったのか。

退けられた「上申書」も

私は取材の過程で、ある「上申書」の存在も知った。事件から約2年後、特捜本部のある愛知県警で別の事件の聴取を受けていたTという男が、「俺は豊明事件の実行犯を知っている」と言い始めた。Tは、面識のないはずの利代さんと夫の交際相手の写真を、他の多数の女性の写真の中からびたりと当てた。実行犯として暴力団関係者や外国人ら4、5人の名前を挙げ、彼らは合鍵を作り、自分は鍵を合わせる上見に行きたとも主

張。周囲の見取り図も正確に描いたという。

色めき立った特捜本部は当時、何方目もかけてTを調べたと聞く。しかし、供述が何度も変遷し、結局は迎合的に信じよう性が低いと判断された。特に、単独犯行説を採る捜査員らはTの話を「疑する」。しかし、これらの供述も完全に「白」にしたのだろうか。

ある捜査1課の元刑事は「俺は9月9日という日に理由があったと思う。それ以上は言えん」と話し、私に「調子に乗っておちろ突っ込んでいくな。殺されるかもしれない」と言っていて電話を切った。9日ではないなら意味があったのか。それは何なのか。

「動機があるんだよ、必ず。人を殺すつてのは、4人がいなくなるよが必要だった人間がいるんだ」。別の元元三つ三刑事は、見えない動機を退職後もずっと想像し続ける。取材に応じてくれた人々は、いずれも熱い思いをもって捜査に当たったのは間違いないと実感している。が、捜査はやはり「尽くされていない」とも思う。

未解決事件の捜査体制は今、どのようになっているのか。私は取材を続けた。



連載「風化とたたかう」の過去の記事はこちら

令和6年7月21日 中日新聞記事

济格差

週のはじめに考える

「私は貧しい地域の出身です。子どものころ、サッカー靴を履くお金がなにもありません。父は港湾労働者、母は清掃員として懸命に働いて養ってくれました。この勝利を両親にさげます」 サッカーのアルゼンチン代表のゴールキーパー(GK)マルティネス選手が2022年のワールドカップ(W杯)で優勝した直後、泣きながら発した言葉です。欧州のプロサッカーリーグには

選手獲得を巡って巨額資金が動くプロサッカー界には、各国が抱える理めがたい経済格差が横たわります。選手たちは故郷の家族を貧しさから救うこと懸命にプレーしますから、大きな勝利を手には感極まって家族への思いを語る光景がみられるのです。近年、日本から欧州への進出も通常の光景になりました。ただ日本人選手の場合、貧困よりも才能

に恵られていました。ところが今年に入り、「日本の格差は思ったより開いているのではないか」と疑わざるを得ない経済格差が出てきました。アベノミクスの後遺症 まずは企業決算です。SMBC日興証券の5月時点の調査では、東京証券取引所プライムに上場する企業の24年3月期決算の純利益合計額は3年連続で過去最高を記



ると家計改善され、の金融資産裕層の金融資産は2199兆円と過去最高を更新しました。日銀は株高で保有株式や投資信託の含み益が膨らんだためと分析しています。これに対し、調査会社の帝国データバンクによると、今年1~6月の企業倒産は4887件と前年同期比22%増となり、6月まで6カ月連続と前年同月を上回りました。日安などで中小を取り巻く経営環境は厳しく、倒産の増加基調は続くとも予測しています。一方で、雇用の創出は企業は出資に苦しみ、暮らしが豊かになり、日本の中環が共存し、広がっている。一つの若者の故郷をアベノミクスの大規模金融引き出し、高金利時代に潜在成長が、一国がすべて活用し、経済に還元する